

2. 研究の詳細

プロジェクト名	幼稚園・小学校での家庭教育支援のためのニーズ調査と理論構成		
プロジェクト期間	2017年5月～2018年2月		
申請代表者 (所属講座等)	小泉 令三 (教職実践講座)	共同研究者 (所属講座等)	なし

①研究の目的

幼児から中学生の子どもをもつ保護者を対象にした家庭教育支援の学習プログラム(保護者のための社会性と情動の学習プログラム: Social and Emotional Learning of 8 Abilities for Parenting, 以下 SEL-8P)を開発するために、育成を図る社会的能力の理論構成を行い、またプログラム提供者として想定している教師を対象にしたニーズ調査を実施して、その結果をもとに学習プログラム内容の構成を提案することが目的であった。

②研究の内容

おもに、次の3点を実施した。

- (a) **社会的能力の検討**: SEL-8P プログラムで育成を図る社会的能力を検討した。
- (b) **ニーズ調査**: 学習プログラムの実施者として想定している幼稚園教員と小中学校教員を対象に、保護者に必要であったり、保護者が求めていると考えられる、子育てに関する事項(ニーズ)を調査しまとめた。
- (c) **プログラム構成**: ニーズ調査をもとに、先行実践も考慮して SEL-8P プログラムの内容の構成を行った。

③研究の方法

上記 (b) ニーズ調査については、次のような方法であった。

・調査対象者

小中学校教員については、A教職大学院に在籍する研修中の教員7名および教員免許状更新講習の受講者で任意の回答に同意した23名が質問紙調査の対象者であった(小学校16名、中学校11名、小中一貫校2名、特別支援学校1名)。また、公立B小学校の校長および教頭が、質問紙調査と同様の質問項目で面接調査に参加した。教職経験年数は1～35年で、平均は18.8年であった。

幼稚園教員については、私立C幼稚園に勤務する12名の教員が面接調査に参加した。教職経験年数は1～9年で、平均は4.2年であった。

・調査時期

2017年7～8月に実施した。

・調査内容

質問紙調査では、学校と保護者の連携の重要性を述べた後、次のような説明文を記載した。「保護者にアドバイスをしたり情報を提供したりして、家庭での子育て支援に役に立った、感謝された、効果が見られたということがあれば、ご記入ください。」これに続いて、8つの社会的能力(「1. 研究の概要」の「研究成果の概要」参照)ごとに簡単な例をあげ、それらを参考に、経験した事項を自由に回答するよう依頼した。

幼稚園教員への面接調査では、質問紙調査と同一の内容、すなわち重要性の説明、質問文、簡単な例を記載した文書を見せながら説明し、経験した事項を自由に口頭で回答するよう依頼した。

・調査手続き

小中学校教員への質問紙調査は、研修あるいは講習の休憩時間等に自由に回答するよう依頼した。回答は無記名とし、回答への協力は任意であり、また回答の有無や内容は成績や評価に無関係であることを口頭で説明した。回収は個別には行わず、グループで一括しての提出か、あるいは休憩時間に無人の回答箱へ個別に提出する方法を用いた。管理職の面接も、回答は任意であることと氏名は記録に残さないことを説明し、了解を得た。

幼稚園教員への面接調査は、幼稚園長の許可のもと第1・2著者が行った。聞き取りに際し、回答者の氏名や所属、回答内容がそのまま公表されることはないことを説明した上で、ICレコーダーでの録音の許可を得た。

面接は一人当たり 30～40 分で、C 幼稚園の 2 つの教室で行なった。

④実施体制

上記 (b) ニーズ調査の研究協力者として山田洋平（島根県立大学）が加わり、面接調査およびその調査結果の分析を共同でおこなった。

⑤平成 29 年度実施による研究成果

(a) 社会的能力の検討

次の 8 つの社会的能力を提案した：自己への気づき、他者への気づき、自己のコントロール、対人関係、責任ある意思決定、生活上の問題防止のスキル、人生の重要事態に対処する能力、積極的、貢献的な奉仕活動（「1. 研究の概要」の「研究成果の概要」参照）。

(b) ニーズ調査

・小中学校教員への調査結果

回答（記述、口頭での回答）を内容のまとまりによって区切り、それを 8 つの社会的能力の区分にしたがって分類してまとめた。記述数は合計 146 であり、それらを複数の記述があった事項と 1 回だけ記述のあった事項に分けた。全体的に、8 つの社会的能力の間では、極端な記述の偏りは見られなかった。

・幼稚園教員への調査結果

録音した面接内容を文字化した後、内容のまとまりによって区切り（小中学校等教員への調査と同様に、便宜的に“記述”とする）、それを 8 つの社会的能力の区分にしたがって分類してまとめた。記述数は合計 94 であり、それらを複数の記述があった事項と 1 回だけ記述のあった事項に分けた。自己への気づき、他者への気づき、生活上の問題防止のスキルが多いのに対し、積極的、貢献的な奉仕活動は少数であった。

(c) プログラム構成

保護者の家庭教育支援のための SEL-8P のユニット配置を次ページの表に示す。表の左端の列は、子どもの年齢区分を示す。最上端の行は、学習内容の区分を表す学習領域を示している。8 つの学習領域は、小中学生用の SEL-8S プログラムや幼児用の SEL-8N プログラム（小泉・山田，2018）とほぼ同一である。これは、子どもを対象にこれらの学習プログラムを実施し、保護者に対しては SEL-8P を実施する場合に、学校と家庭の両方での関わり方を関連づけることが可能になり、教育効果を高めることができるからである。なお、SEL-8P 自体は単独でも実施できるように構成されている。幼稚園が 21、小学校低学年が 13、中学年が 12、高学年が 12、中学校が 18 の合計 76 個のユニットとなった。この構成にしたがって、各ユニットのねらいを検討した。

以上のユニット構成（表）および各ユニットのねらいの作成にあたっては、子ども対象の SEL-8S および SEL-8N の学習内容と、幼稚園・小中学校等教員対象の調査結果等を勘案して構成・設定した。例えば、幼稚園の保護者対象の学習ユニットの「A1 あいさつ」は、SEL-8N の同名ユニット（A1）と、幼稚園教員の面接結果の「生活上の問題防止のスキル」の「基本的生活習慣の発達を促す助言」を関連づけたものである。同じく「A(a) 家庭のルールと育児方針」は、幼稚園教員の面接結果の「自己への気づき」の「保護者の育児の受容と賞賛」と、家庭教育支援のための保護者向け学習プログラム（藤田・小泉，2016）によるものである。

これらのユニットは、子どもや保護者の実態、および子どもが SEL を実施しているのであればその学習状況等に合わせて適宜選択し、実施することを想定している。

⑥今後の予想される成果（学問的効果、社会的効果及び改善点・改善効果）と研究の今後の展望

本研究の成果をもとに、実際に SEL-8P プログラムの学習内容とそのため教材や資料の作成段階に進むことができる。そして、実践のための研修・実施マニュアルを作成し、実践するとともに、その効果を確認することが今後の課題である。その際、ここで提案した構成案の中から、どのような状況（子ども対象の SEL-8S や SEL-8N の実施の有無を含む）で、どのユニットをどういう時期にどの程度実施することが保護者の家庭教育力を高めることにつながるのかを検証する必要がある。

表 SEL-8P のユニット配置表

校種	学年	A 基本的生活習慣	B 自己・他者への気づき、聞く (注2)	C 伝える	D 関係づくり	E ストレスマネジメント (注2)	F 問題防止	G 環境変化への対処	H ボランティア
幼	ステップ1 (注1)	A1 あいさつ「おはよう」 A(a) 家庭のルールと育児方針	B1 感情理解「この顔どんな気持ち？」 B2 聞く「話を聞く」	C(a) 賞賛の伝達	D2 自己制御「仲良くしよう」	E2 ストレス対処「深呼吸」	F(a) トイレトレーニング F(b) 身近な危険	G(a) 転園【個人面接】	H1 家でのお手伝い「私のお手伝い」
	ステップ2 (注1)	A4 食生活「残さず食べようお弁当」 A(b) 気になる行動の対応	B4 他者理解「友だちの好きなところ」 B(a) 子どもの理解と受容	C4 意思伝達「先生あのね」	D3 対人関係「一緒に遊ぼうよ！」	E3 自己の感情理解「不安な気持ち」	F(c) 専門機関との連携	G2 進級「新しい友だち」	H(a) 地域でのボランティア
小	低学年	A4 食生活「何でも食べよう」 A(a) 社会のマナー	B1 自己の感情理解「怒っているわたし」 B(a) 子どもの理解と受容	C1 感情伝達「とてもうれしい！」 C(a) 励ましや感謝の伝達	D1 関係開始「入れて！」 D(a) 子ども同士のトラブル	E1 ストレス認知「うれしいこと、心配なこと」	F(a) 物品・金銭管理 F(b) 身近な危険	G(a) 転校【個人面接】	H2 家庭でのボランティア「わたしにできる仕事」
	中学年	A6 生活リズム「早寝早起き朝ご飯」	B4 他者理解「しっかり聞く」 B(b) 子どもの理解と受容	C3 感情伝達「じょうずだね」 C5 意思伝達「断る方法いろいろ」 C(b) 励ましや感謝の伝達	D3 自己制御「こころの信号機」 D4 協力関係「みんなで力を合わせて」	E2 ストレス対処「イライラよ、さようなら」	F(b) 物品・金銭管理	G(b) 転校【個人面接】	H4 家庭でのボランティア「わたしの役割」
	高学年	A8 あいさつ「こんにちは」	B6 他者の感情理解「相手はどんな気持ち？」 B(c) 子どもの理解と受容	C6 「わたしはしない」は、C5の内容を使うことができます。 C(c) 励ましや感謝の伝達	D5 問題解決「トラブルの解決」	E4 ストレス対処「リラックスして」	F6 万引き防止「それはしない！」 F9 携帯電話「マナーを守ろう」	G6 卒業・進学「いいよ中学生」 G(c) 転校【個人面接】	H6 身の回りや地域でのボランティア「いろいろあるよ」
中	A2 規範遵守「私たちの生徒規則」 A3 時間管理「時間を大切に」	B1 他者理解「“聞く”と“聴く”」 B2 自己理解「短所を乗り越える」 B(a) 子どもの理解と受容	C1 意思伝達「分かりやすく伝えよう」 C4 感情伝達「冷静に伝える」	D2 問題解決「友達に怒っちゃった!？」 D3 携帯電話「顔の見えないコミュニケーション」	E1 ストレス認知&対処「ストレスマネジメントI」 E3 サポート希求「ストレスマネジメントIII」	F1 万引き防止「ダメ!万引き!」 F3 精神衛生「ポジティブに考えよう!」	G1 自己理解「“私”のいいところ」 G2 進路選択「私の“夢”」 G(a) 転校【個人面接】	H1 学校でのボランティア「学校でのミニボラ?」 H2 地域でのボランティア「地域でのボランティア」	

(注) A1, B1 等の表記は、幼児用の SEL-8N プログラム、小学生・中学生用の SEL-8S プログラムの該当する学習ユニットを表す。なお、A(a)のようにカッコ内に小文字アルファベットがあるものは、保護者用のみ SEL-8P で設定したものである。

(注1) 幼稚園の学年は、発達段階に応じてステップ1, 2とする。

(注2) 幼稚園児対象の SEL-8N の学習領域名は、B「他者への気づき、聞く」、E「自己への気づき、ストレスマネジメント」である。

⑦主な学会発表及び論文等

本研究の成果を中心に、さらに家庭教育力の測定に関する事項等も含め、研究協力者2名(山田洋平、島根大学:藤田尋子、九州産業大学)とともに、本学紀要に次の論文として発表した。

小泉令三・山田洋平・藤田尋子 (2018) 保護者のための社会性と情動の学習 (SEL-8P) プログラムの試案構成 - 学校と家庭の連携をめざして - 福岡教育大学紀要, 第四分冊, 67, 195-209.

引用文献

藤田尋子・小泉令三 (2016). 家庭教育支援における保護者向け学習プログラムの分析 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 6, 39-46.

小泉令三 (2011) 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S 1 - 社会性と情動の学習<SEL-8S>の導入と実践 - ミネルヴァ書房

小泉令三・山田洋平 (2018). こどものきもちを育む ♪ 紙芝居作成ブック -CD-ROM 付き- (プリプリ BOOKS) 世界文化社